

文化の担い手が日本語学習者に伝えたい“思い”に関する分析と考察 能楽師へのインタビュー調査より

著者	森川 結花
雑誌名	甲南大学教育学習支援センター紀要
巻	7
ページ	67-86
発行年	2022-03-23
URL	http://doi.org/10.14990/00004219

文化の担い手が日本語学習者に伝えたい“思い”に関する 分析と考察

—能楽師へのインタビュー調査より—

森川結花

甲南大学 国際交流センター
神戸市東灘区岡本8-9-1, 658-8501

概要

本研究では、YiJプログラムにおいて実践されてきた能楽体験ワークショップに参加した能楽師へのインタビュー調査を行い、その語りから、能楽師が伝えたい“思い”の内容の分析を試みた。その結果、能楽師は能の本質である自由な精神活動を許す思想に基づき、参加者たちが感受性と想像力を使って不可視領域の概念を捉えてほしいという“思い”を持っていることがわかった。そして、参加者との双方向の交流を通して得られるフィードバックが能楽師にとっても貴重な自己成長を促す刺激になると認識しており、日本語学習者向けのワークショップの意義について肯定的に捉えていることも明らかになった。

キーワード: 文化体験, 能楽, 感覚, 非言語的情報の伝達, 双方向の交流

1 はじめに

甲南大学 Year-in Japan プログラム(以下 YiJ プログラムと呼ぶ)日本語コースでは、「言語」と「文化」を学ぶことを目標に、日本語授業として文化体験の機会を持つことを特色とする。留学プログラムならではのメリットとして、留学生の身近な環境にオーセンティックな文化財、人的リソースが存在するという点がある。このメリットを活かし、日本語コースのカリキュラムの中に、秋、春の各学期に行われる研修旅行をはじめ、校内での紙芝居、現代短歌、能楽の体験ワークショップ、地域探索活動などの体験プログラムが組み込まれている。

これらの文化体験学習プログラムについては、森川・永須(2019)、谷川(2020)、森川(2021)において、実践報告と学習活動のデザインや参加した留学生の感想、体験プログラムにおける教師の役割についての考察などを行ってきた。しかし、文化体験学習プログラムの構成要素となる参加者として、留学生、教師に加え、人的リソース(文化人や地域在住の民間人)の存在がある

ことを忘れてはならない。「生きた教材」である彼らは留学生(日本語学習者)との交流の機会に何を伝えたい／伝えようという思いを持っているのであろうか。

本研究では、過去に YIJ プログラムで実践した能楽体験ワークショップへの参加・協力経験をもつ K 氏(能楽師)を対象に半構造化インタビューを行い、「文化の担い手として伝えたい思い」の分析を通し考察を進めていく。

2 先行研究

外国語教育の中で文化をどのように扱うべきかを明確に示しているのは American Council on the Teaching of Foreign Languages(1999) “Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century”(邦訳: 21 世紀の外国語学習のスタンダードズ)である。ここでは外国語教育の目標領域として 5 つの“C”, すなわち, Communication, Cultures, Connections, Comparisons, Communities が挙げられている。この中で Cultures については, 「言語は文化的背景を表現し, また社会の慣習に参加するための主たる道具であるゆえ, 言語を学ぶことは学習者に, 他の方法では得ることのできない, ある文化に関する洞察力を養う機会を与える。よって, 外国語の授業の本来の内容は文法や語彙ではなく, 実際は言語を通して表現される文化なのである。学習者が他の文化を鋭く観察し, 分析できるようになることが重要なのである。(聖田(2002:37)から引用)」と記述されるほど重く考えられている。

しかし, 日本語教育の実際の現場では, 森川(2020)の調査で明らかにしたように, シラバスや時間, 教育設備などの外的な要因や教師個人の能力的な限界などの内的な要因に阻まれて日本語授業の中で文化体験を実践したことがないという教師も 25%程度存在する。

本研究の筆者が携わる YIJ プログラムでは, 母体である甲南大学が文化人の人脈に恵まれていることから様々な文化体験学習プログラムの実践に前向きに取り組んでいる。これは, 村野(2001)を根拠とし, 本学における人脈を留学生の生活環境の中に存在する人的リソースと捉え, 日本語学習上の効果を期待して留学生と人的リソースとの日本語を用いた交流活動を行っているのである。ただ, このような文化体験活動は, ともしれば“楽しいだけの一日の思い出”に終わる可能性も孕んでいる。そこで, 森川(2021)で報告した通り, 文化体験学習プログラムの一つである能楽体験ワークショップを, 細川(1997)(1998)に倣って異文化を体験した自分の内面を掘り下げる活動に高めることができるような授業プランを考案し実践した。それでもなお, 課題点として残ったのが, 森川(2022 印刷中)で報告した, ワークショップ中の留学生と指導者である能楽師とのインタラクションの少なさであった。これで日本語と日本文化を同等に学んでいることになるのか? というのが参与観察者であった本研究の筆者の感じたところであった。

留学生と日本文化の人的リソースとの日本語によるインタラクションということを考える上で, そもそも人的リソースからはどんな内容のメッセージが学習者に向けて発信されているのだろうかという疑問も生まれた。人的リソースから発信されているメッセージがどんな内容のもので, それを留学生は受け止めきれているのか。この疑問が本研究のインタビュー調査につながる場所となった。

3 能楽体験ワークショップの実践

YIJ プログラム日本語コースでは留学生全員を対象にしたワークショップ形式の日本文化体験学習を 3 種類, 表 1 のタイミングで行なっている。

表1：YIJプログラム日本語コースで行う日本文化体験学習

学期	時期	活動種類	指導
秋学期(9月～12月)	10月下旬ごろ	紙芝居と伝承遊び	市民グループ
	11月下旬ごろ	現代短歌創作	歌人
春学期(1月～5月)	2月上旬	能楽	能楽師(在学生)

それぞれのワークショップの講師・指導者としてその分野の専門家を招き、留学生と直接対面して指導にあたっていた。したがって、これらの機会は留学生にとっては、彼らの通常の行動範囲の中では出会うことのない人的リソースと直接接触・交流のできる場となる。

本研究の調査対象であるK氏に協力を願ったのは、表1中の能楽体験ワークショップである。能楽体験ワークショップはこれまで2019年2月、2020年2月の2度にわたって行われた。参加した留学生は2019年が37名、2020年が30名であった。能楽体験ワークショップは、前日の準備授業(50分)、当日のワークショップ(100分)、翌日の振り返り授業(50分)という構成になっている。このうち、留学生が指導者である能楽師に対面できるのは当日のワークショップの時間帯である。能楽体験ワークショップの活動内容の概要を森川(2022印刷中)より再掲して表2として示す。

表2：能楽体験ワークショップ授業構成(概要)

	時間	活動内容
(前日)事前準備	50分	能楽の紹介と基礎知識、仕舞鑑賞のための予習、ワークシートのやり方の説明、能面作り
(当日)ワークショップ	100分	仕舞実演、ミニ講義(能楽史、型、能面)、実技体験(すり足、能面、謡)、QAセッション
(翌日)振り返り	50分	感想のシェア、ワークシート完成

以上の能楽ワークショップは、講師役を本学在学中であった能楽師T氏に依頼したこともあってか留学生から好評であった。しかし、森川(2022印刷中)でも述べたとおり、能楽師T氏と留学生間の日本語での活発なインタラクションを導き出せてはおらず、ワークショップ中、無言で通していた留学生も存在していたことが今後解決すべき課題点として見出されていた。

4 本研究の目的

本研究の目的とするところは、文化体験学習において文化情報を発信する人的リソースが情報の受信者である日本語学習者(YIJプログラムにおいては留学生)に向けてどんなことを伝えたいと思っているのか、その“思い”の内容を明らかにすることである。これは、将来、以下の2点を検討する研究につなげるためのものである。

- ①日本語学習者(留学生)にどの程度、人的リソースの発信する“思い”が意図通りに伝わっているか。また、日本語学習者(留学生)は受け止めた“思い”についてどう考えているか。
- ②人的リソースの意図するところと授業プランをデザインする教師の意図にズレは生じていないか。

もし、人的リソース、日本語学習者(留学生)、教師の3者の意図や意識にズレがあることが明らかになれば、そこから授業デザインを修正・改善の糸口が見つかるだろう。そのような学習者(留学生)にとってより深い学びとなり、日本語の習得にも益する文化体験学習のプランを作り込んでいくための基盤となる事実、知見を見出すことが本研究の目的である。

5 調査及び分析方法

5.1 調査方法

本研究の調査は、調査対象となる研究参加者 K 氏への半構造化インタビューによって行なわれた。具体的には K 氏にはあらかじめ質問事項を知らせておき、概ねその質問に沿った形で聞き取りを進めつつ、K 氏の気持ちに従って自由に“思い”を語ってもらうというスタイルでのインタビューであった。

インタビューに先立って K 氏には研究協力承諾書を送付し、調査目的と質問項目、プライバシーの保護とインタビューデータの使用範囲(研究目的以外には一切使用しないこと)、協力はあくまでも任意であり途中で止めることも可能である旨を明らかにしておいた。研究協力承諾書には自筆で署名をもらい、原本を筆者に返送してもらった。

実際のインタビューは 2021 年 11 月、Zoom を用いて行われ、約 60 分間のインタビューデータを採集することができた。

5.2 調査対象

本研究において調査の対象とした K 氏は、2019 年および 2020 年、YIJ プログラムからの協力依頼に応じて日本語コースにおける能楽体験ワークショップに参加した経験をもつ。また、この 2 度にわたる対面形式の能楽体験ワークショップに加え、2021 年 9 月に行われた 2021 年度公益信託兵庫県婦人会館ユネスコ基金助成事業によるオンラインイベント「等身大で語ろう 私たちの、これからの文化」にも参加してもらった。いずれも、講師役を K 氏の子息である T 氏が務め、K 氏は地謡及び補佐役としてワークショップの進行を見守りつつ協力するという立場にあった。そのような立場から、K 氏は客観的にこれらのワークショップを観察することができていたものと思われる。さらに、能楽師としてのキャリアの長い K 氏は国内外での公演及びさまざまな対象者に向けたワークショップ、能楽の啓蒙普及活動、教育活動においても多数の経験を有しており、知見も豊富である。このような理由から、本研究の調査対象者として K 氏に研究への参加を依頼した。

5.3 分析方法

本研究ではインタビュー調査のデータを分析する方法として、大谷(2019)の SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いる。SCAT のデータ分析手順を大谷(2019)より引用する。

(前略)SCAT では、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、

- <1>データの中の注目すべき語句
- <2>それを言い換えるためのテキスト外の語句
- <3>それを説明するようなテキスト外の概念

<4>そこから浮かび上がるテーマ・構成概念

の順にコードを考えて付していく4段階のコーディングと、そのテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。
(大谷 2019:271)

このような手法である SCAT が「1 つだけのケースのデータなどの比較的小さな質的データの分析にも有効である。また、明示的で定式的な手続きを有するため、初学者が着手しやすい分析方法である」(大谷 2019:271)という特徴も有しているため、本研究のインタビューデータを分析する手段として適当であると判断した。

6 分析結果と考察

本研究が行なったインタビューのデータは全体を 112 のセグメントに分けることができた。そこから K 氏の発話である 67 セグメントを抜き出し、さらにそれらを話している内容によって 8 つのまとまりに区切り、各まとまりごとに SCAT の手法を用いた分析を行った。8 つのまとまりには以下のような小タイトルを付すことができる。順序はインタビュー時の話の流れに従ったものである。

1. 現在の日本社会における能楽について思うこと
2. 幼少期から青年期までのライフストーリー
3. 能楽師として舞台から観客に伝えたい“思い”
4. 指導者としてお弟子さんに伝えたい“思い”
5. YiJ プログラムの能楽体験ワークショップに参加して思ったこと
6. 外国人に対する指導を通して思ったこと
7. 学校教育の中でのワークショップを通して思ったこと
8. 将来に向けて思うこと

本章では順を追って K 氏の発話についてのストーリーラインと理論記述を示し、考察を行う。なお、SCAT の分析方法によって得られたテーマ・構成概念は [] をつけて示す。実際の語りを引用する場合は「 」で括り、後ろに(K_56)のようにセグメントの通し番号を示す。理論記述文には(1) (2)……のように順に通し番号をふる。

なお、語りは Zoom のレコーディング機能を用いて記録し、発話通りフィラーなども含めて正確に文字起こしを行ったが、本稿への掲載にあたっては読みやすさを優先し、内容分析に支障のない程度に整えたものを示すことにする。

6.1 現在の日本社会における能楽について思うこと

インタビューの導入部分として、聴き手自身が能楽について馴染みが薄く浅学であることを伝え、現在の日本の社会の中での能楽のあり方について K 氏が思うところから対話を始めた。K 氏は、日本人全体の問題として伝統文化への意識が鈍化している事実をあげ、時代の進行に伴う生活環境の変化に原因があると考えていると述べた。引用中の下線は本研究によるものである。

「日本の自体の環境ががらっと変わってしまいましたので、そこに問題がやっぱりあると思うんです。」(K_13)

「特にあの日本人にはよくお話しさせてもらう時に、何を日本で生きてられて日本人として日本の文化を感じることがありますかって聞くこと、ようあるんです。で、やっぱりなんか、皆さんピンと来られない部分が多いですよ。」(K_15)

しかし、現在でも身近な生活環境の中で“日本文化の再発見”は可能だと K 氏は語る。

「ただでもね、やっぱりいっぱいあるですよ。おはしとかね、食器とかね。同じ器であつたって日本って物凄い、バリエーションっていうんですかね。あのま、西洋のものがいいとか悪いとかというのではないですけどもね。お皿もあればね、器もあるしね。材質も色んなものがありますよね。お箸があつて、木もあれば竹もあつたりとかねっていうような話をする人が多いですよ。そうすると、あー日本人ってものすごい豊かなんですよっていう風なことを感じてくださるんですよ。それがいい悪いは別としてですけどね(後略)」(K_17)

(K_15)と(K_17)引用中に下線を付した「感じる」という語は、K 氏のインタビュー中、繰り返し使用される。K 氏の概念の中で「感じる」ということの重要性が高く、他者に対しても「感じる」ことを求める姿勢が窺える。その「感じる」ことをしなくなった、日本人が自国文化に関する精神活動に必要な感覚を鈍らせていることを K 氏は指摘している。インタビューの導入部分の K 氏の語りのストーリーライン①と理論記述①を以下に示す。

<ストーリーライン①>

K 氏は「日本人の伝統文化に対する関心の希薄さ」を知るにつけ「同国人に対する深い失望感」を覚えつつ、仕方のないものとして「諦念的受容」をしている。「人々の生活様式の著しい変化」に伴って「日本人の意識からフェードアウトする伝統文化」は益々増えている。それは「身の回りの住空間の変化」にも現れている。しかし、「生活環境から消滅しゆく日本の文化」もある一方で、少し「気づきの促し」をすれば「身近な生活環境の中での日本文化の再発見」は現在でも可能である。

<理論記述①>

- (1) 「日本人の伝統文化に対する関心の希薄さ」を知ると「同国人に対する深い失望感」を覚えるが、現時点ではそれは「諦念的受容」をしておくところである。
- (2) 「人々の生活様式の著しい変化」に伴って「日本人の意識からフェードアウトする伝統文化」が増えている。
- (3) 「身の回りの住空間の変化」によって「生活環境から消滅しゆく日本の文化」もある。
- (4) 「気づきの促し」をすれば「身近な生活環境の中での日本文化の再発見」は現在でも可能である。

6.2 幼少期から青年期までのライフストーリー

次に、K氏に自身の能楽師になるまでのライフストーリーを語ってもらった。この部分のインタビューの目的は、自分を育てた教育の理念が成人後の自身の教育活動にどの程度反映するかを知るためである。

K氏自身が受けた能楽の継承教育はごく幼少期から始まるものであった。K氏の語りを引用する。

「生まれて気が付いたら、もう、知らん間になって言いますかね。まあ父が家でも稽古してますし、お弟子さんの稽古しているのが、やはりこう聞いてたりとか、お稽古をしてもらうよりまず前に、それを見ながら真似してる感じで、知らん間に、私らはちょっと、能楽師の中でも、能ごっこって言ったりするんですけども、ちゃんとした形でお稽古をもらう前に、なんかこう見ながら真似してたみたいな感じで、そういう形で、全然当たり前の環境でね、謡が聞こえ、舞を舞ってる姿を、自然と目にしていますので、もちろん父がやってるからってということだと思えますけどね。」(K_22)

幼いK氏は身の周りの生活環境から聞こえてくるもの、見えるものを“ごっこ遊び”の感覚で真似ることを繰り返し、自然に能の技能を身につけていった。子方(子役)時代には舞台を務めた後の賞賛が嬉しく、それが動機付けとなってまた次の舞台を目指すという形で幼少期のキャリアが形成されていった。

「(前略)舞台を立った時に、拍手をもらったりとか、褒めてもらうことがありますでしょ。よく頑張ったねとかっていう。やっぱりそれがものすごく気持ちよかったってことは覚えてますよね。お能ということを何か感じる前にね。ですから、その舞台に立ってる、立って舞台をやった、達成感って言うまではいかないもんでしょうけども。(中略)で、また次の舞台やりたいなっていうことになっていくんですよね。ま、その繰り返しだと思います。うんまあ、本格的にやるまでの間だったんですけどね。」(K_27)

とはいえ、能楽師としての職業訓練のプロセスには厳しい稽古、修行があった。K氏の場合、それを乗り越えられたのは「できないから当たり前」という合理的な解釈での受け止め方ができていたからである。

「(前略)やっぱり昔はね、お稽古は厳しかったと思うんですけども、でもそれがつらいと思ったことは、ないんですよ。ま、自分ができてないから当たり前だな、という風に子供の時は、そういう風に思ってたね。」(K_30)

現在、K氏の実子も次世代の継承者として活動している。K氏の受けた継承教育は厳しい部分も含めて次世代にも引き継がれている。K氏は実子についても自分と同じ感覚で継承教育を受け止めていると推測している。

「(前略)それがつらいという感じは多分、子供(=T氏)なりになかったんと違いますかね。そうやってこう、だんだん、自然と入っていくもんだったと思いますね」(K_31)

以下、K氏のライフストーリーを<ストーリーライン②>と<理論記述②>として示す。

<ストーリーライン②>

K氏の〔物心つく前から始まる能楽師としてのキャリア〕のライフストーリーは〔ごく幼少期から行われる家庭内でのイメージ教育〕から始まる。幼少期は、〔“ごっこ遊び”の中での模倣の繰り返し〕がいつの間にか〔生活環境からの自然習得的な技能の獲得〕になるという形でK氏は能に親しんだ。このような幼少期の教育は本人にとっては〔無意識レベルの感化〕であり、〔強制ではない自然な選択〕として自覚されている。若い能楽師には〔報酬としての賞賛〕も与えられた。〔伝統的な厳しい稽古・修行〕を〔内面での合理的解釈による受容〕によって乗り越え、〔舞台で感じる役者としての幸福感〕を〔職業継続の動機づけ〕としてキャリアを積み重ねていった。このライフストーリーは〔次世代へ引き継がれる継承教育〕として現在でも実践されている。

<理論記述②>

- (5) 能楽の継承者には〔物心つく前から始まる能楽師としてのキャリア〕がある。
- (6) 能楽の継承教育は〔ごく幼少期から行われる家庭内でのイメージ教育〕である。
- (7) 幼い子供にとって〔“ごっこ遊び”の中での模倣の繰り返し〕は〔生活環境からの自然習得的な技能の獲得〕になる。
- (8) 幼少期の継承者教育は子供にとって〔無意識レベルの感化〕であり、〔強制ではない自然な選択〕として自覚される。
- (9) 幼少期には〔報酬としての賞賛〕，成長してからは〔舞台で感じる役者としての幸福感〕が〔職業継続の動機づけ〕になる。
- (10) 能楽の継承者にとって〔伝統的な厳しい稽古・修行〕は、〔内面での合理的解釈による受容〕が可能である。
- (11) 能楽師の家庭の〔次世代へ引き継がれる継承教育〕として現在でも存在する。

6.3 能楽師として舞台から観客に伝えたい“思い”

前節のような教育・養成過程を経てプロの能楽師となったK氏は、舞台人として観客にどんな“思い”を伝えたいと思うのか。逆に、前節のプロセスは、どんな“思い”を伝える能楽師となるためのものだったのだろうか。その点について、K氏は次のように語った。

「えーと、それはま、曲目によっても違いますし、その曲に、まあ、色んな曲、あるわけですね。その曲目によって、その時に感じるものっていうのが。もちろんお稽古は、きちっとしないとイケませんしね。やっぱり、そういう訓練は必要なんですけども、その場で感じるものっていうことは、すごくあると思うんですよね。舞台上で、能の舞台っていうのは、こちらが演じてるものを見ていただくお客様が、ある程度、想像力を持って感じてもらうっていうことが、こう、二つが舞台上であって、一つの舞台になります…(略)」
(K_33)

ここでK氏の述べているポイントは、観客の舞台を鑑賞する際の姿勢である。能の舞台を鑑賞する〔観客の感受性と想像力〕が必須のものとして求められるという。曲(作品)ごとの主題も役者がただ演じるのではなく、観客が受け止め、さらに観客の内面で想像力を持って理解を

深める過程を経て取り込んでほしいというのである。以下に K 氏の観客への“思い”についてのストーリーライン③と理論記述③を示す。

<ストーリーライン③>

能は「演者と観客が対峙する現場で作り上げられる舞台芸術」である。能の舞台でのパフォーマンスが一つの芸術作品世界を作り上げるためには、「観客の感受性と想像力」が求められる。

<理論記述③>

(12) 能の舞台を鑑賞するにあたって、「観客の感受性と想像力」が必要とされる。

(13) 能は「演者と観客が対峙する現場で作り上げられる舞台芸術」である。

K 氏は「その場で感じるもの」という言葉を使って能の現場依存性の高さについても述べている。換言すれば、「一瞬たりとも見逃さず、全身全霊の感覚を使って真剣に受け止め、さらに心の中で作品世界に踏み込んでほしい」ということになるだろうか。

6.4 指導者としてお弟子さんに伝えたい“思い”

飯塚(2012)によれば、能は室町時代後期に“見て楽しむ芸”から“愛好者が演じて楽しむ稽古事”に変化した。そのため、その頃に詞章の固定化や型の固定化が始まったという。能楽師の役割に、能を演じるだけでなく、愛好者に能、謡、囃子を教える“教師”の役割が加わったのにはこのような歴史的な経過がある。

K 氏も日常的に能を愛好する“お弟子さん”の指導にあたっている。また、学校現場などで児童、生徒、学生、一般人向けのワークショップの経験も豊富である。お弟子さんは一般人とはいえ、練習の成果を発表する舞台に向けて一つの作品を仕上げることもある。また、ワークショップの参加者と違い、関係が長く続くという側面もある。指導者である K 氏の思い入れも深いのではないかと推測して、お弟子さんに伝えたい“思い”について語ってもらった。

「ま、これはね、お能に対して思うことっていうのも、皆さん、やっぱり一人一人違うんですよね。(中略)だから、その人によって、私は伝えることも違ってくるとは思うんですけども、まあ、まずは、上手になってもらいたいっていうのはありますね。」(K_35)

「まあ、あの、私たちが持ってるものを、色んなものを使って、その曲に対しての思いであったり、感じてもらうっていうことを、感じてほしいっていうことを、常に言ってるんですよね。なんて言いますか、こういうもんだっていうものじゃなくて、なんかこう、色んな要素を持ってるものがありますけど、それを自分なりにこう、分析して、感じていくっていうことが、何よりも大切だと思うんですよね。そこは皆さん、お弟子さんにもいつも言ってることなんですよね。」(K_36)

(K_35)では、指導の基本は“上手になること”だが、お弟子さん一人一人の個人差に応じて課題や期待するところは違うとしている。しかし、(K_36)では、根本的に大切なこととして曲(作品)の分析とそれについて“感じる”ことの大切さが繰り返し強調される。大前提としてお弟子さん個々人が曲に向き合い、自力で解釈し曲のテーマを感覚として取り込むことが課題

とされていると K 氏は考えているのである。それでは、指導者としての K 氏はそのプロセスにどのように関わるのか。

「(略) 自分なりの思ってることは、私自身は思えないことなので、もちろん色んなやり方があるのは、こういうものですよとアドバイスはしますけども、自分なりに、こう、捉えてほしいということなんですよね。」(K_38)

つまり、アドバイスはするが、K 氏がお弟子さんに正解を示すことはない。お弟子さんの内面、個人的な精神活動の領域には踏み込まないということである。これを、細川(2003)の“個の文化”の尊重と見ることができるのではないだろうか。

また、K 氏は能楽の歴史を振り返り、能がかつて武士の式楽として奨励されていた経緯の中で「誰でもできる」(K_43)「子供でもまあ言えば舞えてしまう」(K_49)ほどのシンプル化、ユニバーサルデザイン化への改良がなされたという。子供から大人まで、すなわち「型」を覚えていけば初心者や素人にでも舞うことのできる仕舞もある。しかし、そのような作品であっても、演者の人生経験や、その時々々の心身のコンディションが如実に反映して違う表現世界が現れるという特性が生まれる。そのように“何度やっても毎回違う”世界に出会うことができるのが能の楽しみで、そこに継続することも意義もある。それを K 氏は以下のように語った。

「(略)ものすごいお能って自由度があると思うんですよね。同じ曲であったとしても、演者が変わったら、全然違ったような印象を与えることもありますし、私が今の年齢に能を演じさせてもらうのと、五年後十年後っていうことになってくるとまた、それも同じことをやっても違ったものに感じるものってあると思うんですよね。(略)」(K_39)

「やっぱり、そのね、その時の花っていうのは、やっぱりみんなある。ま、世阿弥のことばでは時分の花っていうんですけども、(略)やり続けるっていうことは大事なんだと思いますよね。どこでその花を咲かされるかっていうのは、分からないことですからね」(K_51)

以上、K 氏のお弟子さんへの“思い”の語りから作成した<ストーリーライン④>と<理論記述④>を示す。

<ストーリーライン④>

能は〔内包された無限の自由さ〕があるために、〔今・ここ・この人を反映する現場性の高い舞台芸術〕として成立している。したがって、能は演じる場合でも鑑賞する場合でも、それをする人の〔個人の感受性〕と〔曲(作品)に対するオリジナルな分析力〕が必要である。能を習う人の立場で言うと、〔個々人に委ねられている曲(作品)の解釈〕をどうするかが〔指導者の助言以上に重視される要素〕となる。だから、能楽師が弟子の指導にあたる際には、弟子〔個々人のものの見方(perspectives/個の文化)の尊重〕を第一義とするべきである。その一方で、かつて〔“武家の式楽”にするためのユニバーサルデザイン化〕を施された現在の能は〔定型化された動き〕と〔簡素さの極まった核心部分〕のみを残すものとなっている。それゆえ、能は〔外見のイメージとは裏腹のとつきやすさ〕があると同時に、〔お稽古事として存続するために必須となる優劣を競う側面〕もある。これらの側面を備えていることが世間の人々に愛好されることにつながって〔世界最古の芸能としての存続理由〕となった。また、“存続”とい

うことに関して、能楽師 K 氏自身が [“時分の花”を積み重ねて形成していく能役者としてのキャリア] を振り返り、[一つの道を継続することの大切さ] を実感するところであるとした。

<理論記述④>

- (14) 能は [内包された無限の自由さ] を持つ [今・ここ・この人を反映する現場性の高い舞台芸術] である。
- (15) 能を演じる場合でも鑑賞する場合でもそれをする人の [個人の感受性] と [曲(作品)に対するオリジナルな分析力] が必要である
- (16) 能を習う人にとって、[個々人に委ねられている曲(作品)の解釈] をすることが [指導者の助言以上に重視される要素] である。
- (17) 能楽師が弟子を指導にあたる際には弟子 [個々人のものの見方(perspectives/個の文化)の尊重] を第一義とするべきである。
- (18) 現在ある能は [“武家の式楽”にするためのユニバーサルデザイン化] を施されたものである。
- (19) 現在の能は [定型化された動き] と [簡素さの極まった核心部分] のみを残すものである。
- (20) 能には、[外見のイメージとは裏腹のとつきやすさ] がある。
- (21) 能には、[お稽古事として存続するために必須となる優劣を競う側面] もある。
- (22) お稽古事として支持される要素を持っていることが、能の [世界最古の芸能としての存続理由] である。
- (23) 能楽師は [“時分の花”を積み重ねて形成していく能役者としてのキャリア] を持つ。
- (24) 能楽をやっていると [一つの道を継続することの大切さ] を実感するものである。

6.5 YiJプログラムの能楽体験ワークショップに参加して思ったこと

過去2度にわたって実践した YiJ プログラム留学生を対象とした能楽ワークショップでは、K 氏の子息 T 氏が指導役を務め、K 氏は地謡と補佐役として参加した。その立ち位置から参与観察的に現場を見、思うところもあったであろう。本研究としては、留学生がたった一回、半日のワークショップで何を学ぶことになるのか、実際に現場に立ち会った K 氏からはどう見えていたのかを確かめる必要を感じており、K 氏にその点を語ってもらった。

K 氏はまずは実子である能楽師が指導役を経験することについて「素晴らしいことだと思いますね」(K_54)と述べた。その理由を(K_55)のように語った。

「やっぱり何かを伝えようと思ったら、自分なりにこう、ワークショップの間に、子供(T氏)が色々お能を自分なりに考えて、その特にね、文化の違う人に対して、あのお話したりとか、見せたりするっていうことは、やっぱりすごく大切ですし、逆に、自国の文化の素晴らしいものを持っている人たちだから、交流ができるんだと思うんですよ。そういうことが本当はもっともって出ていくということがあった方が、私はいいと思いますし、だから、ワークショップっていうのは、私はすごく素晴らしいと思いますよ。ただ、どう伝わるかはね、分からないですし、なんですけども。」(K_55)

父親の目線から、後継者である実子が能を見つめ直し、外国人に何をどう伝えるかを経験することは能楽師として成長する上でメリットがあるとするのは率直な評価である。また、相手が「自国の文化の素晴らしいものを持っている人たちだから交流ができる」と、相手の文化を

高く評価しているところは、日本語教育の観点から注目すべきポイントである。

また、最後に下線部を付した「どう伝わるかはね、分からないですし、なんですけども」という発言も重く捉えるべきであろう。ワークショップの場でのリアクションや事後アンケートでは留学生たちの評価はとても高かった。しかし、これは“その場のノリで”あったかもしれない。留学生にどんな内容が伝わり、後々まで残る効果としては何があったのかの検証は今後の課題として残っている。

そのほか、K氏は、日本人と外国人との「感じ方」に共通点があることや、能の作品に込められた時空を超える普遍的なテーマがあることに触れ、「皆さん」「私たち」の双方が共通する感受性を持っているという点で対等であるという信念を語った。

「(略)ま、お能の中には特にね、男女の話とかね、親子の話とか、誰もが必ず持っている問題っていうのは、色んな国の方も同じでしょうし、今後ね、百年二百年先の人もこの問題はあると思うので、そういう普遍的なテーマが多いので、感じるものっていうのは、皆さん同じだと思うんですよ。やっぱりそれは、私たちも海外に行って感じることなので、そういうことを知るとい意味ではとても大事なことだと思います。」(K_56)

これらの語りの分析から<ストーリーライン⑤><理論記述⑤>を記述する。

<ストーリーライン⑤>

留学生対象の能楽体験ワークショップについて、K氏は[取り組みに対する高い評価]を表明した。理由は、能楽師にとってこの機会が「自らの文化についての自己省察」を深め、[異文化を背負う人に対する文化伝達]について考えるきっかけとなり[能楽師としての成長]につながると考えられるからである。K氏が海外公演を行った時も、男女、親子の問題など[能の作品に通底する人類普遍のテーマ]が観客に[言語の壁を越えて呼び覚まされる感動]を引き起こすという経験をした。それゆえ、K氏は[伝わることについての確信と伝えることに対する使命感]を強く持っている。よって、K氏はワークショップのような取り組みに関しても[対等な文化と文化の交流の機会に寄せる期待]を抱いているが、[ワークショップ体験が参加者の内面に及ぼす教育効果]については知ることはできない。

<理論記述⑤>

- (25) 留学生対象の能楽体験ワークショップについては、その[取り組みに対する高い評価]を与えることができる。
- (26) 留学生対象の能楽体験ワークショップを指導する能楽師にとって、この機会は「自らの文化についての自己省察」を深め、[異文化を背負う人に対する文化伝達]について考えるきっかけとなり、[能楽師としての成長]につながるものである。
- (27) 海外における能楽の公演をすると、[能の曲に通底する人類普遍のテーマ]が観客に[言語の壁を越えて呼び覚まされる感動]を引き起こしうる。
- (28) 海外公演での成功体験を持った能楽師は[伝わることについての確信と伝えることに対する使命感]を強く持つようになる。
- (29) 留学生対象の能楽ワークショップに関して[対等な文化と文化の交流の機会に寄せる期待]が抱ける。
- (30) ワorkshopの指導者の立場から[ワークショップ体験が参加者の内面に及ぼす教育効

果]を知ることはできない。

6.6 外国人に対する指導を通して思ったこと

YIJプログラムでのワークショップの話の流れから、K氏の海外での外国人に対する指導経験について語ってもらった。K氏は東南アジア某国において、選抜されてきた大学生を相手に4日間の集中的な指導を行い、4日目に発表会での舞台公演を成功させた経験を持っている。指導に際しては、言語の壁に阻まれた。通訳はあったが、「ただね、専門用語も多いですし、ニュアンス的にやっぱりね、お能を知らない人が、あの、通訳してもらおうとやっぱり伝わらないんですよね。(略)」(K_66)という状況で、指導者・参加者共に手探り状態だったようである。しかし、言語では通用しない場でも“感覚”と“身体”がその代替手段として有効であった。

「あのですね、言葉がやっぱり伝わらへんのんですよ。ちょっと伝わらへんというか、喋れないので。ですけどもね、なんて言いますかね、宗教感っていうのか、まあ、その、そういう感覚で、言葉では伝わらないけど何か感じるっていうところがあって、面白かったですよ、すごく。(略)」(K_60)

「(略)で、やっていくうちに、通訳じゃなくて、覚えていくにしても、ここはこうやって、こうやってっていう、もちろん言葉では言えないけども、体でこう、ね、そういうもの伝えるという形しか取れなかったんですけど、それが伝わっていくんですよ。やっぱり言葉じゃないんやなっていうことを、そこで凄く思ったんですよね。」(K_66)

言葉ではなく感覚で伝わるという事実をK氏は「面白かった」と肯定的に評価している。また、体で伝えられるという事実にも「やっぱり言葉じゃないんやな」ということを確信している。技能が身体で伝えられるということは、それが諏訪(2005)の言う“身体知”に落とし込まれるものだからという説明が付けられよう。もう一つの感覚の方については次節で考察する。この節ではK氏が感覚や身体を通じた非言語情報の伝達を言語で伝えられるものよりも高く評価し信頼していると言うことが確認できたと言うところに留めておき、<ストーリーライン⑥><理論記述⑥>を示す。

<ストーリーライン⑥>

K氏の[海外での舞台公演の指導]の経験によると、[言語による伝達の限界]がある中で指導者・参加者とも[意思伝達の手段を手探りで求める状態]であったが、[何か伝わる気がするレベルの非言語的伝達]はでき、それで能の指導は実践できた。双方に[意識の奥底に存在する共通の宗教観]があったことのおかげかもしれない。能に関しては[言語の置き換えにすぎない通訳の限界]があったが、代わりに、[身体感覚による非言語情報の伝達]の手段に訴えて[言語では伝わらない身体知的な情報]を相手に伝えた。その結果、プロジェクトは成功し、参加者には[内面的な成長を証する眼差しの変化]が見られた。

<理論記述⑥>

- (31) [言語による伝達の限界]があると、[意思伝達の手段を手探りで求める状態]になる。
- (32) [意識の奥底に存在する共通の宗教観]があると、[何か伝わる気がするレベルの非言語的伝達]の助けになる。

- (33) [海外での舞台公演の指導] の場で、能に関することについては [言語の置き換えにすぎない通訳の限界] がある。
- (34) [身体感覚による非言語情報の伝達] の手段を通じて [言語では伝わらない身体知的な情報] を相手に伝えることができる。
- (35) 言語の壁を乗り越えて能公演プロジェクトに取り組んだ学生には [内面的な成長を証する眼差しの変化] が確認できる。

6.7 学校教育の中でのワークショップを通して思ったこと

前節の海外での成功が参加者の質(元々能力や意欲の高い選抜メンバー)であったことにもよるところが大きかったのではないかと言う疑問から、話を一般の学校教育における活動に向けてみた。YiJ プログラムのワークショップも事情は同じだが、学校の授業の一環で行う文化体験ワークショップの場合、必ず“やる気のない人”が含まれる。その場合、K氏ならどのように切り抜けるのだろうか。

K氏の経験によると、やはり小学校でのワークショップは児童が喜んで取り組んでくれるのでやりやすく、中学、高校と年齢が上がるにつれやりにくさが増すと言う。ただ、そんなやりにくい集団に対してもこちらのペースに巻き込むという手段はあって、それはみんなで謡を歌うことだと言う。これには「一方的に話をしてるよりも…(略)そんな空気の中にいるようにしてしまう」(K_78)と同時に、「ある意味緊張も取れるんですよね」(K_80)という効果が認められる。

しかし、今の若い世代には馴染みのない和音階の音程や旋律は難しくないだろうか。その質問に対してK氏は否定した。

「まあ、ですけど謡、面白いですけどね。音を取らずに気を合わせたら、合ったりするんですよね。音ばかり合わせたって合わないですよ。だから、たくさんいる中のみんなが、目に見えないところで何かこう感じてもらうということがね、やっぱり大事なことではそれでもう、言ってると思いますよね。で、謡はやっぱり、そういうまず気を合わせるということがとても大切ですよね。」(K_85)

ここで出現したのが下線を付した「気」と言う概念である。「気」とは何で、「気を合わせる」とはどう言うことだろうか。

「どういうことですか。そうですね。なかなか目に見えないもんだからね。でも、気っていうものはあるということは皆さん感じてられますよね。だから、何をというのはなかなか言葉にはしない、言葉で伝えにくい部分でもあるんですけど」(K_87)

「まあ、雰囲気でもあるでしょうし、やっぱり、そうですね、それを言葉で説明するのは、ちょっと難しい部分ではありますよね。ですけどこう、何かをこう、感じる。やっぱり、感じるってということだとは思いますがね。うんうん、子供さんなんか、本当に、小学生なんかは一番それが簡単にできてしまうんですよね」(K_89)

「昨日もですねえ、小学生に高砂の謡を歌ってもらったんですけども、(略)三回目ぐらいには、もう子供、ちゃんと歌ってるんですよね。(略)ちゃんとかう、あの節もね、あの節

はこうやってっていう説明しても、まず聞いて真似ていく訳なんですけども、そういうものをもう三回ぐらいでちゃんと歌えてくるんですよ。やっぱり感覚的なところが大きいとは思いますがね。そういう感覚とかをこう、伝えるとか伝わるっていうのは、人間が相手だったら、ま、できることなのかなっていう気がするんですよ」(K_90)

結局、「気」とは目にも見えず言葉でも説明できない概念であるが、その存在を「感覚で捉える」「感じる」ことができ、人間同士の間での伝達が可能なものである。それを伝える方法としては“真似る”ことや“合わせる”ことがある——ここまで理解して、それではさらにこの自分の感覚を通して「気」のやり取りをする非言語的情報伝達の経験が、言語学習にどんな効果を与えるだろうか。その質問に対して K 氏から出てきたのが次の語りである。

「でも、その積み重ねだと思しますので、それ一つだけで、言葉が喋れるわけでは本当にはないと思いますし、でも、それをいくつもいくつも、こう、積み重ねていくことによってね」(K_96)

「だから、やっぱりその積み重ねしていくっていうことは、大事で、私たちは特に思うんです。人間はやっぱり日々、細胞が分裂して、増えていってますから、やっぱり一日一日できた細胞に叩き込まないといけないんですよ。私たちはそういう風に思って、一日のお稽古を大切にしている。うん、だから、おっしゃってはるのはその通りだと思いますよ。それ一つ二つ見ただけでは何の意味があるかどうかは分からないけど、思っはることを積み重ねていくっていうことは、どの分野でも、大事なことだと思いますけどね。まあ、こっちが思ってるのよね、受け入れる側の人によっても違ってきますけど。やっぱりそれを信じてこう、伝えてあげるっていうことは、指導者として、していくものだと思いますよね」(K_98)

経験を「積み重ねる」ことは繰り返し学習、「細胞に叩き込む」ことは“身体知”への落とし込みと考えて良いだろうか。このことを信念として伝えることが「指導者として、していくこと」と K 氏は言っているが、同時に「こっちが思ってるのよね、受け入れる側の人…によっても違う」とも述べられているように、ワークショップ参加者が“何をどう捉えるか”もまた、一人一人の内面に委ねられた問題だと結論づけられるだろう。

以上の語りから<ストーリーライン⑦>と<理論記述⑦>を示す。

<ストーリーライン⑦>

学校教育の中で行うワークショップを通して、K 氏は、小学校ではこの活動が「子供時代にすべき伝統文化との出会い」として効果的だと思っている。小学生とは対照的に「思春期以降の中学・高校生への指導の難しさ」を常に実感するからである。それでも「多様な経験を通してこそ得られる知見」があることを根拠として指導を進める。指導のコツは「発声と斉唱（謡）をさせることによる集団意識の生成」を最初にすることである。これは「未知の文化に対する防衛的緊張の解きほぐし」にもなる。謡は「現代人の感覚から遠ざかった和音階」を持つが、みんなで「気を合わせること」で実践できる。「気」とは「不可視の領域での感覚」であり「言語化不能な感覚的な存在」として人類が認識しているものである。「子供の特性」として「感覚的な伝達」と「模倣と繰り返しを通じた技能の獲得」に長けていることは確かだが、実は、年

年齢、国籍などを問わず「人類普遍」に誰でもできることである。言語学習と能楽について考えると、どちらも「終点のない生涯教育」で「本物の実力を培うために必要な経験の積み重ね」が求められる。「指導者の姿勢」として、「後天的な技能習得に共通する繰り返し練習の大切さ」を知って「技能の身体知レベルへの落とし込み」の努力をしなければならないという「信念を伝えること」が重要だと K 氏は考えている。

<理論記述⑦>

- (36) 小学校では能楽ワークショップが「子供時代にすべき伝統文化との出会い」となりうる。
- (37) 中学、高校でのワークショップでは「思春期以降の中学・高校生への指導の難しさ」が感じられる。
- (38) 「多様な経験を通してこそ得られる知見」がある。
- (39) 「発声と斉唱（謡）をさせることによる集団意識の生成」をすると「未知の文化に対する防衛的緊張の解きほぐし」になり、ワークショップはやりやすくなる。
- (40) 謡は「現代人の感覚から遠ざかった和音階」を持つが、みんなで「気を合わせること」で実践できる。
- (41) 「気」とは「不可視の領域での感覚」であり「言語化不能な感覚的な存在」として人類が認識しているものである。
- (42) 「感覚的な伝達」と「模倣と繰り返しを通じた技能の獲得」は「子供の特性」と考えられがちであるが、実は「人類普遍」にできることである。
- (43) 言語学習も能の訓練も「終点のない生涯教育」で「本物の実力を培うために必要な経験の積み重ね」が求められる。
- (44) 言語学習でも能の訓練でも「技能の身体知レベルへの落とし込み」のために努力をしなければならない。
- (45) 「指導者の姿勢」として「後天的な技能習得に共通する繰り返し練習の大切さ」についての「信念を伝えること」をしなければならない。

6.8 将来に向けて思うこと

インタビューの最後に、K 氏の将来に向けてのビジョンを尋ねた。K 氏は希望として“双向の国際的文化交流”の機会を多く持ちたいということ、そして、“日本人の課題”を上げた。

国際的な文化交流の機会に関しては、世界的に日本の文化としての能楽を知ってもらいたいというだけでなく、海外からのフィードバックを刺激として受けたいという希望があることを述べた。

「ま、やっぱりその、私たちは、一番公演をね、していきたいというのはまだもちろんなんですけども、(略) 違う国の人から感じられるっていう、同じことをやっても違う捉え方っていうものも、私たちが舞台上でそんな話とか、そういうワークショップの中でも感じたいと思うんですよね。やっぱり、視野を広めていきたいと思えますし、お能ももう本当に、間違っているものはないと思うんですよね。色んな思いを持っていったらね、それは全部間違いじゃないので、色んなこう、思いを、私も自分たちに、受け止めていきたいと思うんですよね。だから、やっぱり何よりも世界の人に見ていただきたいし、知っていただきたいっていう活動を、今後はしていきたいと思えます (略)。」(K_102)

元々、解釈の自由を無限に許容する性質を持つ能のことであるから、舞台公演でもワークショップでも、観客・参加者にどんな感じ方をされてもどれ一つ間違いではない。その感じ方を能楽師が逆に感覚的に受け止め、それを刺激として視野を広げたいという、双方で“感じ合う”体験の場を多く持つことを K 氏は望んでいる。また、“相手の文化を尊重する”気持ちについて、「そういうのを大切にしてくださってるところなんかは…舞台でさせてもらっても、全然足袋が汚れないとかね」(K_103)というような些細なところから伝わり、「真剣に受け止めてくださってるってことですからね。ものすごくそれを感じていて嬉しいですよ」(K_104)「逆に私たちも他の国の文化を大切に受けとかないといけなくなっていくことを感じさせてもらおうでしょうね」と、これも対等に双方で持つべきであると述べた。

“日本人の課題”については、海外留学へ行った時などに「あなたの国の文化は何ですかって聞かれた時に、やっぱり胸を張ってこう、それをね、話ができるような日本人になってほしいですよ」(K_107)という。その必要性を「特に島国なので、外へ出てみないと感じないことなので」(K_110)実感できないかもしれないが、自分の国について「改めて感じてもらうところから、そういう機会(＝海外へ出る機会)はあった方がいいな」(K_110)と K 氏自身は感じているということであった。

以上の語りの分析から作成した<ストーリーライン⑧>と<理論記述⑧>を示す。

<ストーリーライン⑧>

K 氏は[海外での能楽の普及活動に向けた使命感]を持っている。海外での活動では[海外でのリアクションに刺激されることによる自己の内面的な成長]ができることを望んでいる。交流は一方通行ではなく[双方向の文化交流]で、お互いに[他国の文化への尊重の念]のを持っていることが望ましい。このように思うのは、かつて K 氏は[ささやかな行いから伝わる“相手の文化”への尊重の念]を知ったことからである。[日本人の課題]として K 氏が同国人に望むことは[自国文化の再発見と海外への紹介]ということである。日本は歴史的に[島国という地理的条件のデメリット]を持っていた。今後は日本の人々が[島国という閉鎖空間からの脱却]を果たした立ち位置から[自国文化の客観的な観点からの見つめ直し]をすることが必要であろう。これからも[国際的な文化交流の意義]はますます深まっていくと考えることができる。

<理論記述⑧>

- (46) [海外での能楽の普及活動に向けた使命感]を持つ能楽師が存在する。
- (47) 海外で活動することによって[海外でのリアクションに刺激されることによる自己の内面的な成長]が期待できる。
- (48) 理想的な国際的な文化交流は、[他国の文化への尊重の念]を持った[双方向の文化交流]である。
- (49) 理想的な国際的な文化交流の中では[ささやかな行いから伝わる“相手の文化”への尊重の念]を知ることができる。
- (50) これからの[日本人の課題]は「自国文化の再発見と海外への紹介」である。
- (51) 日本には[島国という地理的条件のデメリット]があるので、日本人は[島国という閉鎖空間からの脱却]を果たし、[自国文化の客観的な観点からの見つめ直し]を行うべきである。
- (52) 今後も[国際的な文化交流の意義]はある。

6.9 考察のまとめ

本研究の行ったインタビューでは、能楽師、能を教える教師、能楽体験ワークショップの指導者として経験豊富なK氏からさまざまな知見を得ることができた。それらについて、日本語授業で行った能楽体験ワークショップでの振り返りと絡めて考察をまとめておきたい。

まず、K氏の語りの中で何度も繰り返し出てきた「感じる」という語を手がかりに考えてみる。K氏は能を演じる場合でも見る場合でも、「感じる」ことが肝要であるとしている。演者は自分なりに作品（曲）を分析してテーマを感じ取る。そのテーマを舞台上からの表現として観客に投げかける。観客はそれを感じとる。「感じる」ものは必ずしも言語化できる概念ではない。能の指導においても「感じる」ことが言語による情報伝達よりも重んじられる。言語による意思疎通が不可能であっても、人間は身体感覚で伝えることができる。また、謡は「気」を合わせることでできる。「気」はおよそ人間であれば誰でも「感じる」ことができるものである——以上がK氏の「感じる」ことについての語りの要約である。

この流れからすると、言語学習と、言語は必須ではないという能楽の体験は全く逆行する方向を向き合っているかのように見えるが、それでもあえて能楽体験ワークショップを日本語の授業の中で行う意義を見出すとすると、“言語が通じない状況で意思疎通は可能かどうか”を体験することを目的とするということが考えられる。日本語はHall(1976)で述べられている通り、文脈に強く依存する言語であるとされている。そこでは相手の心情や意図を推察することが求められる。その時に手がかりとなるのは相手の表情や動作で、それを模倣することで相手の内的状態の理解が得られることが長岡(2006)で報告されている。K氏の海外における舞台指導経験においても“体で伝える”ことができたのは人間に備わっている模倣の能力によるものではないだろうか。とにかく、言語の壁がある状況の中で感覚を鋭敏にして、非言語的伝達の試行錯誤を繰り返し、何かが伝わるまでの双方の努力と伝わった時の実感を体験することは、人間のコミュニケーションについて深く省察する貴重な機会ではないだろうか。

また、「気」という、目にも見えず言語化もできない哲学的・文化的概念に触れることも、学習者にとっては日本の文化について考えるきっかけとなるのではないだろうか。「気」とは何か。想像を膨らませたり、また自分自身の文化と比較したりすることも可能である。「能は自由度が高い」ものであり、「何を思っても間違いはない」とK氏が話した通り、学習者も「気」や文化についてどんなことを考えても良い。日本語の上級者であれば、その考えを日本語で表現することはちょうど良い練習になるだろう。

K氏の語りの内容は、過去にYIJプログラムで行ったワークショップの授業デザインについての振り返りにも有効である。まず、体を動かして取り組む体験活動として能楽を選んだことは、妥当な選択であったことが確認できた。能楽は、誰にでも取り組みやすいユニバーサルデザイン化がなされているという特性を持つことから、留学生にとってもチャレンジしてみるものとして無理な活動ではないということが明らかになった。逆に、反省点として思い起こされるのが、過去のワークショップで通訳を入れていたことである。これは能楽師と留学生との非言語情報のやりとりを阻害していたのではないだろうか。教師としては、留学生に指示がスムーズに行き渡り、ストレスなく活動を進行させるためという配慮のつもりであった。しかし、これは逆に留学生の自由な想像力や感受性を抑圧していたかもしれない。改めて、このようなワークショップにおける日本語教師の立ち位置や役割、どこまで人的リソースと留学生の間に踏み込むか、内容的にもどこまで教師が立ち入るかについて考え直さなければならないと感じた。

7 おわりに

以上、日本語授業の一環として実践してきた能楽体験ワークショップについて、その実践の現場を共有してきた K 氏の語りに基づいて振り返りを深めることができた。今後の課題は、留学生が“自分で感じて、何かを発見する”能楽体験ワークショップへの授業プランの改善とその実践である。

K 氏の語りから、お互いの文化を尊重することの大切さ、“繰り返す”ことと“続ける”ことの大切さ、近道もなく終点もない成長・上達のプロセス—という言葉学習と能楽の上達過程の共通点が示された。「その信念を伝えることが指導者としてすべきこと」という言葉は重く響く。本研究で得たこの気づきを今後の日本語教育の指導に還元し、本学の人脈の縁で得られている人的リソースを最大限に活用した体験プログラムの改善を目指していきたいと思う。

謝辞

本研究は、令和3年度～令和5年度科学研究費補助金事業基盤研究(C)「日本で学ぶ留学生の学習動機を促進させる文化体験型授業の設計」課題番号 2100611(代表：森川結花)の一環として行われた。

参考文献

- [1] 森川結花, 永須実香, “日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割,” CAJLE2019 Proceedings, pp. 176–185, 2019.
- [2] 谷川依津江, “文化体験授業に対する短期留学生の期待と評価：アンケート調査とインタビュー調査の結果から,” 甲南大学教育学習支援センター紀要, Vol.5, pp.97-108, 2020.
- [3] 森川結花, “短期交換プログラム日本語コースにおける日本文化体験の意義と学習効果,” 甲南大学総合研究所叢書, Vol.143 “文化の継承と日本語教育,” pp.119-146, 甲南大学総合研究所, 2021.
- [4] National Standards in Foreign Language Education Project, “Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century,” American Council on the Teaching of Foreign Languages, 1999.
- [5] 聖田京子, 外国語学習スタンダードズ, 国際交流基金日本語国際センター, 2002.
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_hon-yaku_9-1usa.pdf, 2021.12.17.確認
- [6] 森川結花, “日本文化体験学習に関わる教師の認識,” 甲南大学教育学習支援センター紀要, Vol.5, pp.31-51, 2020.
- [7] 村野良子, “高校留学生に対する日本語教育の方法: 言語学習と文化学習の統合と学習支援システムの構築に向けて,” 東京堂出版, 2001.
- [8] 細川英雄, “言語習得における<文化>の意味について,” 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, Vol.9, pp.1–19, 1997.
- [9] 細川英雄, “ことばの文化はどのようにして体得されるか: プロジェクト活動の達成と課題,” 早稲田大学日本語研究教育センター紀要, Vol.11, pp.163-176, 1998.
- [10] 細川英雄, “「個の文化」再論: 日本語教育における言語文化教育の意味と課題,” “21世紀の「日本事情」日本語教育から文化リテラシーへ,” Vol.5, pp36-51, くろしお出版, 2003.

- [11] 森川結花, “学習者を対話に誘いざなう日本文化紹介動画教材作成の試み,”2022印刷中.
- [12] 大谷尚, “質的研究の考え方:研究方法論からSCATによる分析まで,” 名古屋大学出版会, 2019.
- [13] 飯塚絵里人, “室町期,” “能・狂言を学ぶ人のために” pp.26-36,世界思想社,2012.
- [14] 諏訪正樹, “身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化,”人工知能学会誌, Vol.20-5, pp.525-523, 2005.
- [15] Edward Twitchell Hall, Jr. “Beyond Culture,” Anchor Press/Doubleday, 1976.
- [16] 長岡千賀, “対人コミュニケーションにおける非言語行動の2者相互影響に関する研究,” 対人社会心理学研究, Vol.6, pp.101-112, 大阪大学, 2006.